

	ペンネーム	住所	川柳	作者が川柳にこめた想い・エピソード
最優秀賞	「みんな」さん	長野県	高野家の 墓とは知らず おまごと	野沢温泉村で生まれ育ちました。母が、小さな畑をやっている、よく姉妹3人いつも一緒に付いていきました。母が作業をしているかわら、そばにある、お墓で3人でままごとをしながら、母が帰ると言うまで楽しく遊んだ記憶があります。大人になってわかりましたが、高野先生のお墓だったようです。子どものすることといえ、さぞご迷惑だったことでしょう。タンポポばかりで、ごめんなさい。
	【講評：特別審査員・武田徹氏】 本来、遊ぶ場ではない墓。それも地元でも超有名な高野辰之博士の墓で遊ぶ無邪気な子どもたち。唱歌「故郷」を作った高野辰之博士の、子どもたちへの優しい眼差しさえもイメージできるところに、この作品の奥深さがある。			
優秀賞	「中年やまめ」さん	神奈川県	雑魚追う 清流子らの 夢だまり	子どもの頃の思い出です。矢口高雄さんの漫画「釣りキチ三平」の舞台になった川が、僕らの遊び場で、魚や夢を追いかける毎日でした。当時は鮎、やまめなど足に触れるぐらい泳いでいましたが、70年経った今は魚も激減し、カジカの姿を見ることはありません。綺麗な川が戻りつつあるようなので期待しています。
	【講評：特別審査員・武田徹氏】 まさに、ふるさとの原風景だ。ポイントは「夢だまり」。唱歌「故郷」の「♪夢は今もめぐりて」「♪志をはたして」の歌詞をもイメージできる優れた作品。			
佳作	「よもやま話」さん	奈良県	半寿過ぎ 郷に帰れば オイ若造	81歳を過ぎ、里帰りした私は、神輿の担ぎ役をやるよう言われました。旧友たちは皆「若造」呼ばわりされていることにびっくり。それもそう、私よりずっとご高齢の方が多いこと。農仕事の手伝い、道普請の下働きなど、力仕事が残っており、高齢の村を肌で実感しました。
	【講評：特別審査員・武田徹氏】 超高齢社会や限界集落をうまく表現している。「オイ年寄り」と言われるよりも、時には若者扱いされ嬉しいという気持ちもある。そんなことが想像できる面白い作品。			
	「北沢龍玄」さん	長野県	壁に墨 遠いいたずら 染みたまま	帰省して思うことは、かつて遊んだ足跡が壁などに残っていることです。
	【講評：特別審査員・武田徹氏】 ふるさとの原風景は、昭和の高度経済成長時代以降、激変した。いたずら書きをした壁の染みが、子ども時代を思い出させてくれる。作者のふるさとは、昔のままなのか。激変する風景への風刺も感じられる作品。			
	須藤 茂夫 さん	東京都	古里は 小鮎釣るにも 入漁料	古里は子どものときのままでいて欲しい思い。そんなことはありえないんですけどね。
【講評：特別審査員・武田徹氏】 雑魚が自由にとれた清流も様変わり。おそらく清流も濁ったのでは。ふるさとの変化を皮肉った諧謔の効いた川柳らしい作品。				
	「宮のふみ」さん	栃木県	いつまでも 里の訛りの 独り言	普段の会話では、すっかり訛りが抜けているのですが、独り言はふるさとの訛りのまま。私の奥底には、ふるさとが息づいています。
	「まるりん」さん	島根県	汲み取りの トイレが怖い ばあちゃんち	母の実家のトイレが本当にこわかったです。
	「カンちゃん」さん	愛媛県	蛙・蛙・蛙が囲む 母の家	父亡き後、実家には母一人が暮らしていました。母の家は山深い田舎で、季節が来ると周りの田圃からは、おびただしい蛙の鳴き声が聞こえていました。それもまた、都会にはない、田舎らしい風情ある生活環境でした。